

[総合地域研究所 令和元年度「共同研究」報告]

# 医療と地域社会・産業界・行政の連携による 街づくりの可能性と課題に関する研究

研究代表者：藪内 正樹（敬愛大学経済学部教授）

指導・協力：北原 茂実（医療法人社団KNI理事長）

牧野 篤（東京大学高齢社会総合研究機構副機構長／東京大学大学院教育学研究科教授）

協力：柏市・多世代交流型コミュニティ実行委員会

## 1 はじめに

少子高齢化による現役世代の負担増によって、日本の医療保険制度は破綻に向かっている。破綻を回避するための診療報酬抑制は、病院経営を悪化させ、医療を衰退産業へ向かわせる。医療の衰退は、国家の衰退をもたらす。

医療の衰退を避けるため、北原茂実・医療法人社団KNI理事長は、医療と社会の改革を主張し<sup>1)</sup>、東京都の八王子と宮城県の東松島、カンボジア、ベトナム、ラオスで医療施設を運営し、自身が提起した未来型医療の構築を実践中である。

北原氏が主張する未来型医療とは、まず、医療を「いかに良く生き、良く死ぬかをプロデュースする総合生活産業」と再定義することから始まる。病気を発症してから医者に頼るのではなく、孤立や不安を解消した健康で心安らかな生活を、病院を核とした地域全体のネットワークで実現しようというのである。そして、病院自体もデジタル化し、さらにスパ、遊歩道、農場などを備えることにより、病気になって仕方なく行くところではなく、自然に人が集まり、行けば知識が増えて健康になる、ヒーリングファシリティへの進化を目指している。

また、先進国の医療は、研究開発に多額の投資が必要となることから、投資を回収するため輸出産業化することが必要となる。ところが日本は、経済は先進国であるにも関わらず、医薬品は2兆円以上、医療機器は5,000億円弱の大幅な貿易赤字を毎年計上している。カンボジア、ベトナム、ラオスなどで病院を運営する目的は、日本の医療を輸出産業化するためである。ただし、日本が陥っている医薬品や高額な医療設備を多用する重厚長大型医療を輸出するのではない。現地に適合し、持続的発展が可能な未来型医療と一緒にあって創造するため、それに適した日本の機器や資材を輸出するのである。

本共同研究は、北原氏に学びながら、日本の医療の未来を切り開く道筋を見出そうとするものである。昨年度の報告では、日本の医療の問題点について論考するとともに、健康長寿や健康と幸福感の関係に関する米国の研究を参照し、それらを踏まえた北原氏の未来型医療の概念と実践の状況を述べた。本稿では、2018年度グッドデザイン賞を受賞した北原氏が実践する「サステナブルな『医療』を実現する——八王子モデル」を昨年に続いて参照し、次に、健康長寿な地域社会づくりの実践例として、東京大学の牧野篤教授が指

導・協力した千葉県柏市の高柳地区における多世代交流型コミュニティ「地縁のたまご」を報告する。それらを踏まえ、医療と地域社会の改革のための要件を考察する。

## 2 未来型医療の実践——八王子モデル

世界一の超高齢社会に突入した日本では、2030年に高齢化率は33%に達し、東京都内の世帯の40%が独居高齢者になると予想されている。一人暮らしの高齢者が居宅内、あるいは外出先で意識不明になると、医療情報が不明のままでは病院はすぐに治療を開始できないことがある。また、不幸にして亡くなった場合、引き取り手の有無や費用支払いの可能性も分からない。そうした時に、病院が緊急搬送の受け入れを拒否する事例が既に出ているが、今後、さらに増えることが確実視されている。これは行政や医療体制の大きな問題であるばかりでなく、高齢者自身にとっても大きな不安である。

こうした高齢者の不安を解消するために北原病院グループが2018年4月から開始したのが、医療情報や遺言を登録するデジタルリビングウィルであり、2019年7月から拡充した、買物代行や修理などあらゆる生活支援サービスを提供する北原トータルライフサポートである。それは、医療を「いかに良く生き、良く死ぬかをプロデュースする総合生活産業」と再定義した未来型医療の具体化にほかならない。そして、人と自然と技術の調和によって、病院自体も、あらゆる情報通信技術を活用したデジタルホスピタル、「治療の場」から「健康を作り出す場」としてのヒーリングファシリティへ転換することを目指している。それら全体が「サステナブルな『医療』を実現する——八王子モデル」として2018年度グッドデザイン賞を受賞した。賞主催者は、その受賞理由を次のように説明している<sup>2)</sup>。

超少子高齢化、独居高齢者急増によりますます医療が求められるが、既に日本の医療・介護は財源と労働力の枯渇により、持続が困難な状態に陥りつつある。本事業では医療を持続させるため「国民皆保険に依存しない医療」、「病院現場の徹底的な効率化」、「病気にならない、病気になっても安心して生きられる街づくり」の実現に向けて取り組んでいる。

独居高齢者は様々な理由で適切な医療が受けられず、退院後の生活にサポートが必要になることが多い。また、世界と比べて遅れている医療現場の合理化やIT化を進め、業務の効率化と医療の質を高めることは急務である。

国の財源に頼れない以上、時代に即した新たな医療体制と高品質低価格な生活支援サービスをビジネスとして構築することが必要となる。

八王子モデルは、以下の4つのシステムで構成されている<sup>3)</sup>。

### 1) ヒーリングファシリティ<sup>4)</sup>

2018年1月に開院した北原リハビリテーション病院は、病気になったから仕方なく行く場所ではなく、人が自然に集まる場所に変えるとのコンセプトでデザインされた。人と自然と技術の調和により、そこに身を置くだけでストレスを除去し、自然治癒力が高まって健康になれる空間を目指している。

1,500mの地下から掘った温泉を利用したスパ棟を建て、車椅子から自分で入れる浴槽や家族風呂、エステ・コーナーなどが配置されている。遊歩道や農園、牧場を配置し、身体機能やうつ病のリハビリに活用するとともに、収穫物は病院内のレストランで、健

康に良く美味しい料理の材料として提供する。さらに将来は、果樹園とワイナリーも造りたいとしている。また、未来型医療の構築に参加しようとする企業やNPOが集うインキュベーションセンターとしての会議室や宿泊施設も、旧病院棟を利用して整備する。

## 2) デジタルホスピタル<sup>4)</sup>

IoT (モノのインターネット) やAIの駆使、いわば病院の自動運転システムを目指している。医療水準向上と業務効率化によって、医療現場の生産性を飛躍的に向上させる。NECと共同で下記のシステムを病院内で開発・実証中である。

- a) 顔認証システムによる出入管理 (セキュリティ向上)。
- b) 患者に快い病院環境制御 (スノーブレン=感覚刺激空間): 温度、湿度、照度、音楽などを、患者の状況に応じて自動的に制御するシステム。
- c) 不穏行動予兆検知システム: 脈拍や血圧など生体データをモニターすることにより、独言から始まり離床、徘徊、奇声、暴力、事故へと発展する不穏行動を、40分前に71%の確率で検知することに成功している。
- d) 退院予測システム: 入院3日後までの電子カルテデータから、退院時期と転退院先を84%の精度で予測することに成功。入院予約や家族の準備などに極めて有用である。
- e) 誤嚥性肺炎の高リスク患者の検知: 電子カルテデータから精度87%で予測に成功。
- f) AIと接続した音声端末による看護支援: 現状では電子カルテへの書き込みだけだが、看護記録業務の58%が削減された。将来的にはAIから指示を出し、シフト交代時の引き継ぎが不要となり、経験の長短によらない高水準の看護が可能となるシステムを目指す。その結果、看護師が患者に向き合う時間が増える利点がある。

## 3) デジタルリビングウィル

会員制度としてのシステム。医療歴などの個人情報、検査や手術に関する承諾、延命措置の希望から遺言に至るまで、会員の意思 (Living Will) をAIに登録する。登録された情報は、生体認証で識別された本人と契約病院だけがアクセスできる。外出先などで意識不明に陥った場合でも、「本人の意思」に沿った迅速な医療サービスを受けることが可能となる。その際に必要となる費用は、信託銀行に預けた資金から自動的に支払われる。将来的には、音声で入力する日常生活の状況をAIが分析し、病気発症のリスクを予測して助言するシステムの構想もある。

## 4) 北原トータルライフサポート倶楽部<sup>5)</sup>

超高齢社会で予想される問題を解決するための会員制システム。デジタルリビングウ



写真1 北原リハビリテーション病院  
(2017年12月竣工時)



写真2 スパ棟: 車椅子から自分で入れる浴槽

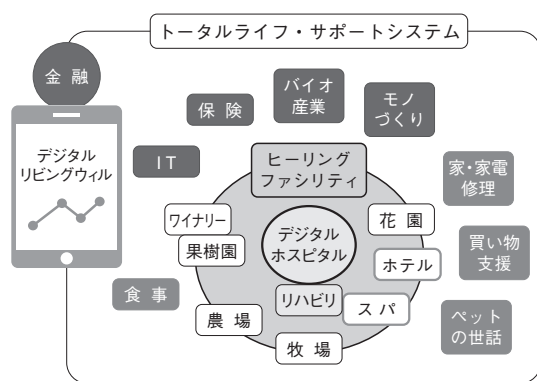


図 1

イルの登録・運用を中心に、オプションとしてオーダーメイドの生活支援、医療・介護サービスからなる。サービス項目は下記が用意されている<sup>6)</sup>。

＊ライフサポートサービス：家事や買物代行、送り迎え、旅行や外出への付き添い、行政手続き支援、植木剪定、家電修理、ペット預かりなど、介護保険の枠を超えた生活支援サービス。

＊ライフサポートコンシェルジュ：健康や生活に関することを何でも相談できる。

＊成果保証型リハビリテーション：医療保険の限度外で行う自費リハビリテーション。

＊そのほか、理学療法士による「からだ覚醒メソッド」、メディカルフィットネス、メールによる医療相談、身体・認知機能検査、セミナー、イベントなど。

上記の4つのシステムが、病院のAI化＝徹底的な効率化と、医療の再定義＝病院内の医療から街全体、生活全般へ拡大した総合生活産業化の2つの柱による、サステナブルな未来型医療の具体的な内容である。

### 3 健康長寿のための社会改革——「人とのつながり」の回復

日本が直面する医療保険の破綻ないし医療の衰退を回避するには、医療と社会の両方の改革が必要である。医療の側の改革は、前項で述べた総合生活産業としての未来型医療「八王子モデル」が有力な解決策と思われる。他方、社会の側の改革は、昨年までの報告で紹介した「ブルーゾーン」、健康長寿の人口比率が特に高い地域の研究によって、大きな示唆がある。それは、健康長寿は「人とのつながり」の緊密さによってもたらされるということである。

以下、「ブルーゾーン」の研究が明らかにした健康長寿の要因、そして「人とのつながり」を回復する地域活動として、柏市高柳地区の「地縁のたまご」の事例を紹介する。

#### 1) 「ブルーゾーン」の研究

昨年までの報告でも触れたが、90歳を過ぎても現役で働き続ける人の人口比率が特に高い場所が世界で5ヵ所見つかっており、「ブルーゾーン」と呼ばれている。5ヵ所とは、イタリア・サルデーニャ島ヌオロ県、ギリシャ・イカリヤ島、アメリカ・カリフォルニア州ロマリンド、コスタリカ・ニコヤ半島、そして沖縄である。

2004年から、アメリカの研究者、ダン・ペットナーはナショナルジオグラフィックと組み、医者、人類学者、人口学者、栄養学者らのチームを率いて、これら5ヵ所の研究を行った。その結果見出した健康長寿の要因は、①よく体を動かす生活、②生き甲斐、③ストレス解消の習慣、④植物中心の食事、⑤腹八分目、⑥少量の飲酒、⑦健康的な習慣を共有する社会グループへの参加、⑧互いに助け合うコミュニティへの帰属、⑨高齢者を大切にする家族の絆である<sup>7)</sup>。

9項目中、⑦～⑨は「人とのつながり」であり、②生きがい、③ストレスも人間関係に影響される。つまり、健康長寿の要因9項目中4項目は身体に関わることだが、残り



の5項目は人間関係に関わる心の問題なのである。言い換えれば、健康長寿の秘訣は、「健康な生活習慣」と「人とのつながり」と言うことができる。

癌も含めて病気の原因は、発癌物質などの病原体と免疫力の低下であり、免疫力を低下させる最大の原因はストレスである。高齢者が家族に大切にされることは、家族の中で役割を持ち続けることであり、生きがいが持続することである。そして、互いに助け合うコミュニティへの帰属は、不安によるストレスを軽減し、健康長寿を増進する。こうした役割を果たすコミュニティは、宗教もそうだが、戦前まで日本全国で行われていた「頼母子講（たのもしこう）」と呼ばれた相互扶助システムも該当する。沖縄では戦後も「模合（むえー）」と呼ばれる互助システムが続いており、毎月集める金を、困っている人がいればその人のために使い、誰も困っていなければ皆で飲食する。そして、次は何に使うか、日常的に行き来して相談し合うという。

ストレスが免疫力の低下に大きな影響を及ぼすことが医学的に明らかになっている以上、互いに信頼し合い、何でも相談し合い、いざとなったら助け合う、家族や地域、サークルなどの「人とのつながり」を社会全体で回復することが、医療の衰退を避けるための第一の方策と考えるべきであろう。

## 2) 多世代交流型コミュニティ「地縁のたまご」<sup>8)</sup>

2010年、柏市高柳地区<sup>9)</sup>に9つある町会をまとめる区長が、区内の学校と3つのボランティア組織に「地域を見直そう」と呼びかけ、東京大学高齢社会総合研究機構副機構長の牧野篤教授に依頼し、4回にわたる講義と話し合いを行った。そして、ボランティア組織の代表たちが役員となって、多世代交流型コミュニティ実行委員会が設立され、子ども、子育て世代、高齢者が手をつなぎ、「地縁のたまご」という構想の下、一つの家族のような地域を作ろうというプロジェクトが開始された。

高齢者は「自分の孫になかなか会えなくて寂しい」、子どもたちは「お父さんもお母さんも仕事が忙しくて寂しい」と、それぞれ寂しさを抱えている。もし、地域に住む子ども（他人の孫）と高齢者が手をつなぐことができたなら、両方の寂しさを解消できるという構想である。「たまご」とは「他人の孫」の意味。

代表の常野正紀氏が、発足時に提起した理念が「鎮守の森」だった。地域住民の一人ひとりは木であり、みんなは森で、森は多くの木を育てる。

活動の中心となっている高齢者たちは「多世代さん」と呼ばれ、頼られる存在となっている。「地縁のたまご」が目指すのは、ここで育った子どもたちが親になった時、またここで子育てしようと思ってくれることである。

中心となる3つのボランティア組織のほかにも多くのボランティアサークルが協力し、10を超えるテーマの教室、毎週土曜の朝市、年2回のお祭りと遠足など、幅広い活動を展開している。実行委員会が全体を束ねているお陰で、イベント開催時、中心となるボランティアサークルのメンバーだけでは手が足りない時、サークル間で人手を融通し合うことができる。

多岐にわたる活動は、地域による学校支援と、児童生徒の地域活動への参加、の2つに大別できる。教育は本来、家庭・学校・地域の三者によってなされる。地域が協力して子どもたちの寂しさを解消することは、低下していた地域の子育て力の回復でもある。また、高齢者の寂しさを解消は、生き甲斐の回復でもある。「地縁のたまご」の取り組み

を始めて9年、子どもと高齢者が変わり、親たちが変わり始めたという。

高柳地区には、日本各地から視察団が来訪するようになり、韓国やスウェーデンからも来た。世界で最も充実した福祉政策で知られるスウェーデンが、なぜ視察に来たかという、福祉が充実しても「生き甲斐」の喪失が解決できないからだという。

高柳地区の取り組みが9年間でこれほどの成果を上げることができたのは、それ以前に、荒れた中学校を立て直した保護者のボランティア組織の存在と、活動を企画し準備するために集まる場所＝コミュニティカフェの存在に負うところが大きい。

#### ① 「地縁のたまご」を生む土台となった学校支援組織

1998年、荒れていた柏市立高柳中学校の呼びかけに応じ、60名ほどの保護者が結集。1999～2000年、文部省（当時）「地域子ども活動促進事業」（地域で子どもが参加する社会活動を行う団体に対する補助金事業）に取り組んだ。

2000年、補助事業終了とともに「みんな集まれ柳の木」を発足。高柳地区の小学校2校、中学校（後に高等学校、特別支援学校も参加）の児童生徒による地域の清掃活動や道徳教育など、学校支援活動を開始。毎年5月に域内5校の児童生徒600人と大人たちで地域のゴミを拾い、分別や排出炭素量の計算、感想発表を行う「びか美化運動」を実施。

同じ2000年、高柳小学校を支援する「高柳小おやじの会」が発足。

2004年、「大津川をきれいにする会」が発足し、鎌ヶ谷市から柏市を抜けて手賀沼へ注ぐ大津川に蛍を呼び戻すことを目指し、7、8、1月を除く毎月第3日曜に川の清掃活動、学校の校外学習支援、高柳児童センターちゃれんじクラブの支援を行っている。

「大津川をきれいにする会」発足を機に、高柳中学校の提案で3つのボランティア団体を中心に、10以上のボランティアサークルが協力するTCN（高柳地域ネットワーク隊）を結成。登下校見守りや環境整備、学校行事支援、ゲストティーチャー、不登校支援などの学校支援、地域活動への児童生徒参加などを通じ、保護者と地域などのネットワーク化による教育支援を実施してきた。

〔TCNの状況〕<sup>10)</sup>

- \*活動：登録450名が、配布したワッペンを着用して活動。見守り、声かけ、あいさつを実施。うるさいおじさん、おばさんを増やそうと呼びかけている。
- \*利点：a) 地域の窓口一本化・さまざまな団体による多方面の活動、b) 地域側で主体的に活動、c) 地域と学校の緊密化により授業での地域人材活用、d) 地域行事が多く、子どもの良い経験の機会となっている。
- \*成果：a) 子どもにボランティア精神が根付き、川の清掃も当たり前のこととして定着、b) 子どもが地域住民に挨拶し、話を素直に受け入れ、高齢者とも親しくなっている、c) 学校行事での教員の負担軽減（地域行事参加では負担増）、d) 地域住民同士の関係強化、e) 地域の教育力向上・生きがいつくり、f) 地域に開かれた学校づくり
- \*課題：a) 高齢化、世代交代が大きな課題、b) 多くの協力団体の思惑がそれぞれ違うので、学校として変えたいことが変えられない、c) 団体ごとの地域行事が多く、休日出勤などで教員の負担が増えるので行事が集約されると良い、d) 団体側のコーディネート人材の育成、e) 学校側の地域連携担当職員の配置・育成

#### ② 「地縁のたまご」の活動内容

- a) 「コミュニティカフェ『茶論』」（次項参照）



写真3 コミュニティカフェ「茶論」

飲み物	メニュー	ケーキ
挽きたてホットコーヒー…110円		ドリュッショコラ
アイスコーヒー…110円(夏のみ)		キャラメルスイーツ
紅茶		モンブラン
ホット…110円		
アイス…110円(夏のみ)		
ポット紅茶(2杯分)…160円		
(ダージリン)		
冷蔵庫内		
紙パックジュース…90円		ケーキ各種…150円
お茶(小)…100円		ケーキとコーヒー…250円
お茶(大)…120円		ケーキと紅茶…250円
		ケーキとポット紅茶…300円
		箱代…100円

写真4 「茶論」のメニュー

- b) 「地縁のたまご教室」：子どものたまご教室（硬筆、毛筆、パソコン、囲碁、将棋、折り紙、工作、ロボット）、大人のたまご教室（工芸、大正琴、ウクレレ、合唱、ボールウォーキング、我が町探検講座、介護予防教室）
  - c) 「土曜朝市」：毎週土曜。ラジオ体操、土曜広場（将棋、囲碁、オセロ、折り紙など）を併催。
  - d) 「高柳祭」：納涼盆踊り大会
  - e) そのほか：地縁のたまごまつり（事業報告、児童太鼓演奏、野菜・鉢植え・苗販売、竹細工・工芸教室、豚汁・パン・和菓子販売）、小学生春休み歩き遠足（児童200人、住民30人）、小学生夏休みバス遠足（児童100人）、研修旅行（30人）、東大キッズセミナー（工作やトリック文字などの勉強会）、理科大おもしろ実験、サンタクロース派遣、焼き芋体験、小学校（ステップアップ学習会）、中学校（図書ボランティア、カフェでの職業体験）、高等学校（ライフスタイル授業、幼児と遊ぶ、フードデザイン教室）
  - f) 参加団体活動：ぴか美化運動、大津川清掃、大津川湧水調査、大津川上流域の自然と歴史を歩く、田植・稲刈体験、サギソウ鑑賞会、紫陽花の里（植樹）、校外学習「里山探検」支援、児童センターちゃれんじクラブ支援（川・森探検）、学校・農業・森林ボランティア、線香花火大会、餅つき大会
- ③ 活動の拠点＝コミュニティカフェ「茶論」

営業は火、水、木、土曜の10～17時（冬は30分繰り上げ）。50人の登録者から交代で2人が店員として茶菓を提供している。近隣住民や子どもたちの教室開催や、打ち合わせなどに利用されている。収益は「児童育成積立金」に積立て、学校の環境整備に寄付している。近隣センター・児童センターに隣接した旧ガレージを改装して設置。このカフェができるまでは、なかなか活動が具体化しなかったという。イベントの併催やスタッフの融通など、多くのボランティア組織の間の調整や実行委員会との打ち合わせ、会計処理などのため、集まって相談する場所が必要だったのである。

荒れていた中学校を立て直そうという切実な目的で結束した保護者の集まりと、川に蛍を呼び戻そうという環境ボランティアが、多世代交流型コミュニティ実行委員会の土台となった。そして活動を展開するのに欠かせない場所がコミュニティカフェである。

高柳地区の事例は、ほかの多くの地域でも共有できる条件があり、参考になろう。

#### 4 おわりに

日本の医療保険の破綻あるいは医療の衰退産業化を回避するには、医療と社会の双方を

改革することが必須である。医療の改革については、「八王子モデル」が有力な方策だろう。「八王子モデル」を提案し実践する北原氏は、著書『あなたの仕事は「誰を」幸せにするか？——社会を良くする唯一の方法は「ビジネス」である』（2011）の中で、「改革には多くの反対があるだろう。しかし、圧倒的な成功事例を示せば、世の中はついて来る」と述べていた。しかし最近、北原氏は、余りにも変えようとしない人が多いため、絶望感を味わっているという。

しかし、医療保険は確実に破綻に向かっており、医療は着実に衰退に向かっていく。いずれ立ち行かなくなった時、「八王子モデルしかない」ということになるだろう。八王子の「トータルライフサポート倶楽部」は有料の会員制だが、少なからぬ高齢者は貯蓄を潤沢に持っているため、多くの会員を獲得して成果を上げ、日本の医療が立ち行かなくなった時の選択肢として浮かび上がると思われる。

一方の社会の改革は、柏市高柳地区の実践が大きな示唆を与えてくれる。多世代交流型コミュニティ「地縁のたまご」の実践は、子育て支援、学校教育、健康長寿など、多世代の問題を同時に改善するモデルとなろう。多世代交流のコミュニティができれば、ブルーゾーンの要件の一つである沖縄の「模合」や戦前に多く存在した「頼母子講」のような「互いに助け合う」関係も復活する可能性が出てこよう。課題は、そのきっかけと、中心となって担う人材であろう。

本共同研究は、千葉においても、医療と社会の改革の動きを起こす方策の探究が目的だったが、医療の変革については、「八王子モデル」の成功と社会の認識を待つしかないと思われる。一方の社会の改革は、高柳地区に見るように、日本各地で同じ方向の動きが始まりつつあると思われる。高柳地区の多世代交流型コミュニティ実行委員会の発足に関与した東京大学の牧野教授の教えも得ながら、そうした動きを押し進めたいと考える。

（報告書作成：藪内正樹）

（注）

- 1) 北原茂実氏は3冊の著書で主張を述べている。『「病院」がトヨタを超える日 医療は日本を救う輸出産業になる！』2011/1/21 講談社、『「病院」が東北を救う日』2011/11/22 講談社、『あなたの仕事は「誰を」幸せにするか？——社会を良くする唯一の方法は「ビジネス」である』2014/8/29 ダイヤモンド社。
- 2) グッドデザイン賞公式ページ <http://www.g-mark.org/award/describe/48199>
- 3) 「北原病院グループの八王子モデルがグッドデザイン賞を受賞しました」 <https://join4future.com/report/8785/>
- 4) 「人と自然と技術の調和『ヒーリングファシリティ』と『デジタルホピタル』」 <https://join4future.com/hfdh/>
- 5) 「北原トータルライフサポート倶楽部」 <https://totallifesupportclub.com/>
- 6) トータルライフサポート倶楽部パンフレット <https://totallifesupportclub.com/wp-content/uploads/2019/07/ebf2c83e84fa781abd75977ebc4b3e21.pdf>
- 7) ①「長寿地域『ブルーゾーン』に学ぶ健康の秘訣」2017/12/28 日経ビジネス <https://business.nikkei.com/atcl/opinion/15/283738/122700046/>  
②“The Blue Zones of Happiness: Lessons From the World’s Happiest People,” Dan Buettner, 2017/10/3
- 8) 「地縁のたまご」に関する情報源：多世代交流型コミュニティ実行委員会・常野正紀代表へのインタビューおよび「地縁のたまご」ホームページ <http://ta-mago.com/>
- 9) 高柳地区：高柳、高柳1-2丁目、高柳新田、南高柳、高南台1-3丁目。人口13,402人、世帯数5,581戸（2019年10月）。
- 10) 「地域と学校の連携について（答申）」平成31年2月5日、柏市社会教育委員会議。

やぶうち・まさき Masaki Yabuuchi  
きたはら・しげみ Shigemi Kitahara  
まきの・あつし Atsushi Makino